

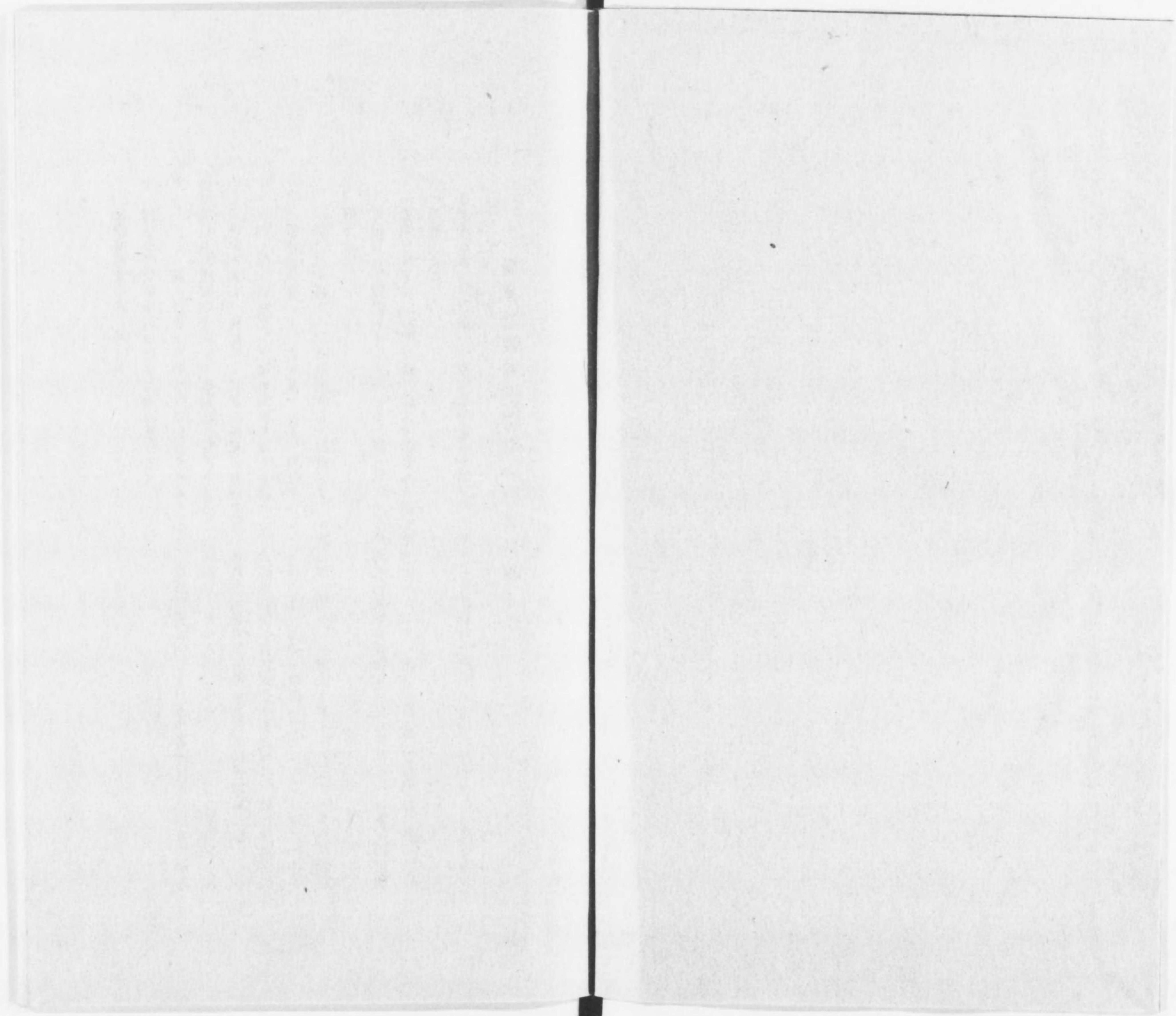
9 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 1 2 3 4 5

311
89

佛果碧巖破關擊節の刊行に際して

始





佛果碧巖破關擊節の刊行に際して

加賀大乗寺に、所謂「一夜碧巖」なるもの、所蔵せらるゝことは、世間周知の事實である。建擧記に左の記事を見る。

「寶慶三年丁亥日本貞元年ノ冬、天童ニ告暇ス、即夜半入室。……ソノ薄暮ニ得ニ佛果碧巖集。手ヲ繕寫シ玉フニ、全備スマジキヲ心中ニ憾ルニ、忽チ白衣ノ神人來テ助筆シテ畢ル。コレハ日本ノ白山權現ナリ。

「補。コノ真本ハ、加州大乗寺ニ秘藏シテ、一夜碧巖ト稱ス。今流布ノ本トハ別ナリ。佛果碧巖破關擊節ト題シテ、序モ跋モナシ。垂示ノ次ニ、本則ト頌ト並テ、著語ハ常ノゴトシ。次ニ本則ノ評ト頌ノ評並ブ。文字モ流布ノ本ト少異アリ。余加州行脚ノ時大乗寺ニ冬安居ス。因ニ堂頭益州和尙ニ請シテ拜讀ス。祖筆ト神筆ト墨痕分ル。希有ノ法寶ナリ。其後寫本ヲ得テ秘藏ス。」

建擧記は道元禪師の五百五十年遠忌を記念するために編纂せられたもの、その刊行は文化三年丙寅（西曆、一八〇六）、即ち昭和十六年を去る百三十五年である。建擧記編者の寫本はその後如何なりしかを知らず。駒澤大學で先年編成せられた禪籍目録に、

「碧巖破關擊節錄 五、寫」



と云ふ書入れがある。(七三五頁)これが其寫本か。尙同頁に、
「碧巖破關擊節錄 五、享保十九」

とあるのは刊本か。寫とも何ともないから、刊本かとも思はれる。この表題で見ると、どうしても「一夜碧巖」のこと、しか考へられぬ故、そんな刊本が有つたとすれば、建擧記の編者も見て居さうなものに想像せられる。享保十九年は今から二百餘年前である。禪籍目録の編者は實際その本を見たのかどうか知らん。

今津洪猷氏が先年春陽堂發行の「禪の書」中に碧巖錄に關する書誌學的研究を寄せられて居る。その中に左の記事がある。參考になるので此に引文する。

「漢興祖芳の樹下堂漫記、第十七に、「寶曆戊寅八年(西、一七五八)冬十月十四日。爲若州・小濱・空印寺・閑居・面山和尚相見、參伺。三條富小路西入町裏坐敷南側。芳、問、永平開祖一夜碧巖事。師云、某甲曾ヲ拜闕ス。碧巖真本ハ。加州大乘寺室中ニ納之。小本ニテ長ケ六寸ホド、ハ、四寸五六歩程ニテ、十六行廿五字。(編者註、此數字は何れも正確ならず)甚ダ細字。永平開祖ハ、コトノ外能書ニテ細密見事ニ見ユ。白山權現助筆ノ所ト見エテ、筆法ワカレタリ。歸朝ノ出帆ノ前夜寫ス所ナリ。本則ト頌ト一ツニナシテ、本則ノ評、頌ノ評トナラフ。下語モアリ。某甲、先年因縁ヲモチテ、人ノ寫シ得タルヲ借リテ寫之。寫本ニテハ七卷ニナシタリ。尤曹洞一派ニテモ、板行流布ノ相談モア

レドモ、世間流布ノ本ノヨロシキ所モアリ。又、一夜碧巖ノ方ニ、ワロキコトアリ、ヨキコトモアリテ、互有得失。シカレバ、一夜碧巖ト名高ク人ノ渴仰シテ居ルヲ、板行シテ見タレバ、サマデノコトモナキト、人ノ信ヲサマスモ如何アルベキ。ヤハリ板行セズト、イマ、デ、人ノ崇敬シテ一夜碧巖ト思フテイルトホリニシテオク方ガ、ヨロシカルベクテ、流行ノコト止メニナリス。」

「一夜碧巖」は大乗寺秘藏のもので、五重に包まれて保存してある。自分はこんな古文書を鑑賞する知識がないので、包装とか装幀とか、紙質・墨色・裂地・筆蹟など云ふ諸方面にわたりて、詳しく記述をする能力がない。但、こんなことしか云へぬのを愧ぢる。即ち最後に古色を帯びた帙を開くと、左の扉に「一夜碧巖集全」と云ふ字がある。どうもこれはもと／＼表にあつたものでなからうか。何かの理由で帙をひつくりかへして、題簽そのものを大切にするやうになつたか。或は帙の表面を保護するためか。寫本そのものは、上下二卷に分たれて居る。上卷は五十九葉、下卷は四十二葉。竪八寸六分位、横五寸一分位。用紙は薄葉のやうに薄いが、それに裏打がしてある。綴方は現今の和綴書籍と同じ。字面は各頁に七寸五分×四寸一分の面積を塞いで居て、天地左右はいくらか空處を有する。十五行に大體各行平均三十二字づめ、中々細かく書いてある。所謂白山權現の手傳はれた處は、字體が違ふやうにも見られる。それは下卷の八十一則のところからである。併し八十一則以前にも手蹟の違つたと思ふところもあるやうだ。

手蹟のかはると云ふ初めの頁を下巻の第三面に玻璃版としておいた。讀者はこれを上巻の初め及び下巻の第二面に掲載したものと比較研究して各自の結論を引き出されたい。下巻の第四面も自ら白山権現の助筆と考へられるから、これも比較研究の材料になるであらう。

自分には書誌學的及び古文書學的知識も鑑識もないので、こんな書物をその方面から批判する能力を有たぬ。但しその道の人に聞けば、此書は固より宋代のものであらうが、道元禪師の手寫ではなくて、彼地の人であらう、と云ふことである。識者の高見を待つより外ないのを遺憾とする。

寫誤の可なりに多いこと、誤字脱字も相應にあるところから見ると、『一夜本』は道元禪師の校訂を経ないものと判定してよからう。餘り文字のなかつた書記生の手になつたものではなからうか。即ち禪師は歸朝間際に碧巖集の存在をきかれて、誰かに寫させられたものであらう。或は『一夜本』の原寫本其ものを入手せられたかも知れぬ。板本があつたら、その板本を求められたであらう。『一夜本』は板本を寫したものであるまい。禪師の頃にはまだ板本はなかつたと考へてよからう。あつたとすれば、『一夜本』の如き未完成の寫本が残つては居まい。『一夜本』のやうなものがあつたと云ふ事實は、一面、未だ板本のなかつたと云ふことを證據すると云つて可い。

建・撕記に記す如く、『一夜本』の題名は『佛果碧巖破關擊節』、『上』或は『下』とだけで、序文も跋も何もない。本則の直ぐ次に頌を措いて評唱も本則の頌のとのべつになつて居る。『垂示』は『示衆』と

あり、その場處も必ずしも流布本のと一致せぬ。例へば、流布本第一則の垂示は『一夜碧巖』には見えずして、第二則『至道無難』の則の『示衆』となつて居る。即ち『乾坤窄、日月星辰一時黑、云云』の垂示がそれである。而して第二則には流布本の第三則、『馬大師不安』の則に對する垂示、即ち『一機一境、一言一句、云云』が示衆として加へられて居る。こんなやうな轉換がいくらかの則について見られる。垂示については又後に述べる。

本則や頌そのものには大した字句の増減變改は見當らぬやうだが、評唱のうちには時にかなりの相違がある。次に其例を擧げて讀者の一覽に供する。

一、第五十一則、雪峯是什麼

『一夜本』(卷下、四、五頁)

巖頭常示衆云。明眼漢勿棄白。却(透)物爲上。透物爲下。這末後句。設使親見祖師來。也理會不得。

流布本(卷六)

巖頭常用此機。示衆云。明眼漢沒棄白。却物爲上。透物爲下。這末後句。設使親見祖師來。也理會不得。

德山齋晚。老子自捧鉢下法堂去。巖頭道大。小德山。未會末後句在。雪竇拈云。會聞說。

古云。只許老胡知。不許老胡會。

自今自古。公案千差萬別。如荆棘林。透得去。天下人不奈何。三世諸佛。亦不奈何。

巖頭道。雪峯雖與我同條生。不與我同條死。這一句。自有出身之處。

二、第八十九則(流布本、第八十六則)、雲門三門 厨庫

「一夜本」(卷下、四、五頁)

自照列孤明。自家腳跟下。本有一段光明。只是尋常用得暗。

所以雲門道。與你羅列此光明。作麼生是諸人光明。

箇獨眼龍。元來只具一隻眼。殊不知。德山

是箇無齒大蟲。若不識巖頭識破。爭知得昨日與今日不同。諸人要會末後句麼。

只許老胡知。不許老胡會。

自古及今。公案萬別千差。如荆棘林相似。你若透得去。天下人不奈何。三世諸佛。立在下風。

你若透不得。巖頭道。雪峯雖與我同條生。不與我同條死。只這一句。自然有出身處。

流布本(卷九)

自照列孤明。自家腳跟下。本有此一段光明。只是尋常用得暗。

所以雲門大師。與你羅列此光明。在你面前。且作麼生是諸人光明。

厨庫三門。此是雲門列孤明到底光明。

盤山道。心月孤圓。光含萬象。光非照境。境亦非存。者裏是真常獨照。

然後爲君通一線。亦怕人著在厨庫三門處。

卻道花謝樹無影。日又落。月又黑。盡乾坤大地。

黑漫漫地。爾還見麼。看時誰不見。到者裏。

當明中有暗。勿以暗想相觀。當暗中有明。勿有明相。遇明暗各相對。彼此如前後步。自可見。

雪竇道。見不見。好事不如無。合見又不見。合明又不明。

倒騎牛兮入佛殿。還入黑漆桶裏去也。須是爾自騎牛入佛殿。看是什麼道理。

厨庫三門。此是雲門列孤明處也。

盤山道。心月孤圓。光吞萬像。這箇便是真常獨照。

然後與君通一線。亦怕人著在厨庫三門處。厨庫三門則且從却。

朝花亦謝。樹亦無影。日又落月又暗。盡乾坤大地黑漫漫地。諸人還見麼。看時誰不見。且道是誰不見。到這裏。當明中有暗。暗中有明。皆如前後步。自可見。

雪竇道。見不見。頌好事不如無。合見又不見。合明又不明。

倒騎牛兮入佛殿。入黑漆桶裏去也。須是你自騎牛入佛殿。看是什麼道理。

此の如き相違が『一夜碧巖』と流布本の間に在ることは、容易に説明せられる。それは碧巖なるものは、圓悟が自ら執筆したものでなくて、弟子が提唱のあつたときに、これを書き取つて、各自に保存してあいたのを、有志の人々が後から校訂して出来たものである。此の校訂寫本が圓悟又は大慧の在世時代に刊行せられたかは、疑問である。が、とに角、此く編修せられたもの、或は然らざりしものもまた禪徒の間に傳寫せられて居たことは、事實であらう。而して是等の寫本の流行は既に圓悟の生時にあつたものであらう。固より圓悟自身は未だ嘗てこれを檢閲したことがないのである。まして此く綴録集成せられたもの、或は集成とまでも行かなかつたものが、その後大慧によりて、燒却せられたとすれば、碧巖集の未成品たる特質は、今日の流布本の上にあいても、見られるわけだ。

(もつと甚しい例は、第十九則『俱胝一指頭禪』及び第八十八則(流布本では第八十五則)『桐峯庵主作虎聲』及び其他を見よ)。

『一夜』本が碧巖の原形を保存して居る一例は、各則における項目の次第でわかる。即ち本則の次ぎにすぐ頭を置き、本則の評唱、それから頭の評唱となつて居ることである。流布本のやうに、本則とその評唱、それから頭とその評唱となつて居ない事である。流布本は張明遠刊行のとき整理せられたものであらう。福本も蜀本も恐らくは、流布本の如くであつたらう。これを證據だてる事例は、不二抄に於け

る一記事に見られる。第百則『巴陵吹毛劍』の本則の評唱の書きはじめに關して不二抄は福本と流布本との異同につき左の如き記述をなす。

『巴陵不動至恁麼地也。福本云。三更月落影照寒潭。且道向什麼處去。直得天下下衲僧醉後郎當愁殺人。僧問。巴陵。如何是吹毛劍。陵云。珊瑚枝。枝撐著月。四海五湖多少不動干戈。天下人舌頭落地。雲門接人如此。它是雲門的。子。古人云。我愛韶陽。老古錘。利地。△不二曰。此語與雪竇頌結句著語相似。福本今本必有誤。』

この所述を流布本のに比較して見るとかうである。便利のため、『一夜本』及福本をも並べて見る。

『流布本』本則評唱文の冒頭數句

『三更月落。影照寒潭。且道向什麼處去。直得天下太平。醉後郎當愁殺人。』

(右四句は雪竇の頌に對する圓悟の下語として流布本所載)

巴陵不動干戈。四海五湖多。

『一夜本』本則評唱文の冒頭數句

三更月落。影照波潭。且道向什麼處去。直得天下太平。醉後郎當愁殺人。僧問。如何是吹毛劍。陵云。珊瑚枝。枝撐著月。

枝撐著月。

四海五湖多少。不動干戈。

福本、本則評唱文の數句

三更月落。影照寒潭。且道向什麼處去。直得天下衲僧。醉後郎當愁殺人。僧問。巴陵。如何是吹毛劍。陵云。珊瑚枝。枝撐著月。

枝撐著月。

四海五湖多少。不動干戈。

少人。舌頭落地。雲門接人
正如是。

他是雲門的弟子。亦各具箇作
略。

是故道。我愛韶陽新定機。一

生與人抽釘拔楔。

這箇話正恁麼地也。

天下人舌頭落地。雲門接人
如此。

它是雲門的弟子。

古人云。我愛韶陽三月裏。

鷓鴣啼處百花新。

者話正是恁麼地。

天下人舌頭落地。雲門接人
如此。

它是雲門的弟子。

古人云。我愛韶陽老古籩。

利地。

是に由りて觀ると、『三更……愁殺人』の數句は、雪竇の頌に對する圓悟の下語であるのが當然であらう。流布本即ち張本は此點で整理がついて居るが、『一夜本』と福本とは『三更……』以下を評唱文に屬するものと見て居る。此錯誤の起つた事情を考へると、碧巖の原形に在りては、本則と頌とは各々下語を併せて、始めに順次並置せられ、それから本則の評唱、引續いて頌の評唱と云ふことになつて居たものであらう。さうでないといふ福本のやうに、『三更……』を本則の評唱の冒頭に置く理屈はない。整理の際、『僧問巴陵……』以下から切り放して、本則の次に置くべきを、『三更……』から切り取つたのである。それは『一夜本』の如く、寫字生が細註と大字との區別を忘れたのである。『一夜本』では雪竇頌の

下語（細註）の大きに本則の評唱（大字）があるので、頌の下語から本則の評唱へ移る際に、寫字生又は監督編者の手ぬかりが考へられる。福本の場合では、不二抄に『必有所誤』と云つて、その誤りの根據をつくことが出来なかつた。本則と頌とが離れて居て、其間に本則の評唱が挿入せられて居るからだ。『一夜本』が福本や蜀本よりも原形を保存して居ると云ふのは、右の事情によるのである。流布本の基だと云ふ張本に至りては、餘程整理の手が届いて居る。それでもまだ未整理の部分が所々に見られるが。

流布本の碧巖集は、素から關無黨の『後序』なるもの及び普照の序を有して居たか。これが疑はれて仕様がないのである。流布本は關中の張明遠の刊行に係るものであらうと信ぜられるが、此張明遠の刊本にはもとから關無黨の『後序』があり、又併せて普照の前序があつたであらうか。これを考へて見る。普照と無黨とが同じ本に對して前序と後序とを書いたと思はれぬ理由は、双方とも碧巖集の成立事情を述べて居て、それが同一でないといふことが第一。次に同一本の前後に、その編集の本末を、兩人して記すべきわけがない。而してそれが一は宣和乙巳（西、一一二五）で、他は三年を隔てた建炎戊申（西、一一二八）であり、その上、普照は關人で、無黨は蜀人ではなかつたかと考へられるのである。普照の序には『粵に佛果老人あり。碧巖に住する日、學者迷うて請益す。云云』とありて、成都に在

りし日の事に及ばぬ。然るに無黨の序には『圓悟老師、成都に在りし時、予、諸人と與に、其説を請益す。師、後に夾山と道林に住し、復た學徒之を扣く。凡そ三たび宗綱を提ぐ。語同じからずと雖、其旨は一なり。云云』とあり。もし同一本に對しての序文であつたとすれば、一人は三處における圓悟の提唱を記し、他は夾山だけに止めてよくと云ふ理由はない。

それから普照また云はく、『普照幸ひに師席に親しみ、未聞を聞くを得たり。道友集めて簡編と成し、鄙拙その本末を敘す』と。これによりて觀れば、普照の碧巖集は明かに夾山（碧巖）におけるその師の説法のみを録したものに外ならぬ。普照本は成都及び道林の説法には關係して居ない。これに反して、無黨本は、成都夾山、道林の三處における説法を參照して居ると考へなければならぬ。『語雖不同、其旨一也』と云ふのを見てわかる。それから又進んで曰はく、『門人撮つてこれを録す、既に二十年なり矣。師未だ嘗て過ぎつてこれを問はず。四方に流傳して或は踳駁を致さん。諸方且つ其言に因つて、其道を以て之を尋釋すること能はず、而して妄りに改作することあらば、則ち此書遂に廢せん。學者幸ひに其傳を誦かにせよ』と。無黨序が『既二十年矣』と云ふは、其書の成都説法に基づくものなることを證する。序は千百二十五年の日附で、その二十年前（或はもつと精確に云つて二十四年前）に、圓悟は初めて蜀都に來た、それから説法があつて、それを弟子等が書きとつておいたとすれば、宣和乙巳（西、一一二五）年から溯りて『二十年矣』と云つて的確であらう。とに角、無黨本は、成都説法を基體として居る

と考へなくてはならぬ。それで宣和、建炎の頃には二種の碧巖集寫本があつたのである。普照本も無黨本も共に寫本であつたと信ずる。門弟中の或人達が、師匠の説法を覺帳に記して留めておいたのであるが、それだけでは、各自に記憶や領解の謬りなども多かるべきわけであるから、彼等の間には自ら筆記帳校合の運動が起つたであらう。それが普照序の『道友集成簡編』であり、無黨序の『妄有改作』とらんことを恐れて、『誦其傳』にした所以である。而してこの兩個の編録事業に對しては、説法者の圓悟自身は何等關係して居ない。弟子は師匠に相談も何もせず、自分等の間だけで、覺帳を大切にしておいたものであらう。否、それよりも、さきに無黨序中にある如く、既に『流傳四方』したものであらう。而して此流傳の事實が、無黨をして踳駁防禦工事を始めしめたのである。普照本の成立は無黨本のやうに、此間の消息がはつきりしないが、『其或泥句沈言』むことあらんを恐れたと云ふを見れば、精確に筆記帳を整理しておく必要を矢張り認めて居たには相違あるまい。

普照本と無黨本との間に、何か連絡があつたかどうかと云ふ問題であるが、此は今日知られる限りでは『なかつた』と云ふべきであらうか。普照本は普照本として夾山における圓悟の説法を基とし、無黨本は無黨本として、成都・夾山・道林の説法を撮つて録したものであらう。が、二本はいつまでも獨立して行くべき性質のものでなく、いつかは比較校訂して一箇の碧巖集底本が作成せらるべきである。併しさうは云ふものの、この種の『底本』として、自ら嚴密な校訂を経べきものではない。詳しく言へば、

『底本』にも幾種かあつたものであらう。一箇基本的なものと云ふべきはなかつたであらう。或は『蜀本』及び『福本』として知られて居る二種類があつたと考ふべきではなからうか。普照本は福本の原形であり、無黨本は蜀本の原形であつたと見ては、無理だらうか知らん。それで張本は大體の上において福蜀二本を参考して出来たものであらう。張本には張本の原形があつたであらうが、福・蜀の二本と、その組立—即ち垂示、本則、評唱、頌、及び又その評唱と云ふ順序において、二三箇處を除きて大概一致して居るところを見ると、三本の交渉は十分に認められる。また本則と頌との下語においても、多少の出入増減はあつても、整理せられてある。

張本刊行以前に何かの刊本があつたかどうかと云ふに、何かあつたことはあつたと思ふ。併しこれが大慧の焼いたものか如何と云ふに至りては、頗る疑問だ。刊本があつたとすれば、それは大慧の關知せぬところ。而して彼の荒療治を受けたのは、刊本でなくて、寫本であつたと信ぜられる。或は焼却の事實も疑ひたいのであるが、それは第二次の詮索にする。予の意見では、大慧の焼いたと云はれる紹興の初年頃には、刊本の碧巖集はまだ存在して居なかつたであらう。その理由はかうである。

大慧焼却を傳へる最初の記事は、心開雲賞禪師が張子韶（九成字子韶、號無垢居士）に與へた書中にある。何れも大慧と同時代の人であるから、心開の文書は信すべき價值があるとも云へる。併し何だか可笑

と思はれる文句もある。

『天・禪問。雪竇以辯博之才。美意變弄。求新琢巧。繼汾陽爲頌古。籠絡當世學者。宗風由此一變矣。逮宣政間。圓悟又出己意。離之爲碧巖集。彼時邁古淳全之士。如寧道者。死心・靈源・佛鑿諸老。皆莫能迴其說。云云。』

引文中『離之爲碧巖集』の句、意義明らかならず。離は或は離ならんか。即ち圓悟は自分の意見を述べたものを碧巖集として、板行したとの義であらう。それで後文に

『紹興初。佛日（大慧）入闍。見學者牽之不返。日馳月鶩。漬成弊。即碎其板。開其說。云云。』

とあるのがわかると思ふ。即ち心開によれば、圓悟の手で碧巖が出来上り、而してその碧巖の所説が大に宗門の禍であつたかのやうにとられる。然かし其頃の大宗匠達は手を束ねて爲すところを知らず、随分困つたと見える。果して然りしか。大宗匠達は、圓悟の博識宏辯、意到り、言達するところ、禪の宗旨が縦横自在に説かれるのを以て、却てこれを『達摩未だ來らざる時の因縁を激揚せざる』（佛鑿の語）ものと考へたらしい。圓悟の相弟子であつた佛鑑懃の如きは此心を以て彼を誡しめて居る。『たゞ恐る。晚進後昆、其言句の尖新なるを疑ひ、以て佛法は只此の如しとなさんことを』と、懃は云ふ。或は然りしならんも知れぬが、禪を以て圓悟の碧巖に於ける『垂示型』の表現で其意を盡したものだと思へられて

も、甚だ遺憾であらう。世は轉じ人智は改まり行くものとすれば、碧巖的表現、碧巖的解釋も亦大いにその時機相應のものとするべきであらう。それは兎に角として、圓悟は決して碧巖集を作つて居ない、又之を板にして居ない、普照及び關無黨等の諸弟子にしても、それ／＼の序文には碧巖刊行の旨を洩らして居ない。紹興の初めに（西、千三百三十一年）大慧が關に入つたとすれば、それは普照の序文（西、千三百二十八年）を去ること三年、關無黨のを（西、千三百二十五年）去ること六年である。もしその時既に事實上刊行せられて居たとすれば、大慧はどの板を焼いたか。兩方とも焼いたか。此頃碧巖の如き大本を板にすることは容易ならぬことだと思ふ。板にしたとすれば、圓悟自身も一遍は目を通うすものと考へたい。いくら整理しても、まだ十分に整理してない張本或は流布本の碧巖は、どう見ても弟子達の覺帳を校合した程度を出て居ない。大慧は板を焼いたものでなくて、手當りの寫本を集めて焼いたものであらう。心聞は『事實』の報告において、精確性を缺いて居ると云つてよいと、予は思ふ。

それから圓悟の『洪機捷辯出沒淵奥、頗る諸方に異り、古今未だ有らざりしもの（佛鑑の語）とすれば大慧の焼板事件は當時の人の耳目を聳動したものであらう。従つて大慧の年譜にも、彼の一大功業としてこの事が書きこまれてもよいわけではなからうか。然るに傳者は更に其事に言ひ及ばざりしは何故であつたか。大慧の焼却したのは、板本などと云ふ大袈裟のものでなくて、手近の寫本位に止まつたものではなからうか。板本を焼いたとすれば、而してそれが心聞の言ふやうに圓悟自身に手を下したものであつたとすれば、大慧は其師の圓悟を弔ふ文中にも何か此事實に言ひ及ぼすであらうと信ぜられる。それが無いとすれば、焼却の一件は大した出来事でなかつた。何時か誰かが誤つて『斷粹不傳』と書いたもので其以來は劇的要素が事實以上に強化せられたものであらう。『宗門第一書』と云ふ扉は張本刊行のときのものと思ふが、其銘文には、『一炬之後善刻不存』とあり、多少曖昧の文字であるが、明白に板を燬くとは言はず。方萬里の序（西、千三百二年）にも、休休居士の序（西、千三百五年）にも、三教老人の序（千三百四年）にも、それから天童比丘淨日の序（西、千三百二年）及び徑山住持希陵の後序（西、千三百十七年）にも、何れも、板を燬くとは云はぬ。『重刊圓悟禪師碧巖集疏』は誰の作なるかわからぬ、張明遠のものかとも考へられるが、其始めに二三字下げて前書き見たいなものがある、それに『斷粹不傳』の句がある。此疏とその作者に關する考證は予の力の及ぶ限りでないが、其處だけに碧巖集の板が燬かれたと出て居る。これを張明遠のものとも見ても、これだけでは十分でない。『疏』と云ふものと重刊との關係もはつきりせぬ。そんなら張本以前に何等の刊本もなかつたかと云ふに、それは『何かあつた』と云ふ方が妥當であらう。『宗門第一書』の銘文のやうなものには、

『今多方尋訪得成都大聖慈寺白馬院趙大師房真本。與江浙諸禪刹所藏本參攷無訛。敬繕梓以壽其傳。云云。』

とあるが、此『真本』の義が判然せぬ。刊本か寫本か、わからぬが、徑山住持比丘希陵の後序には、

『偶獲寫本後冊』又獲雪堂刊本及蜀本。校訂訛舛。刊成此書。流通萬古。云云。

と云ふ。これによれば、張明遠は碧巖集の寫本の後冊と雪堂の刊本と蜀本との三種類を入手したことが明かである。『宗門第一書』の銘文と此の希陵の文との間に、どんな關係があるかわからぬ。趙大師の房の眞本が蜀本に相當するものであらうか。流布本第五卷の末尾に『此集自大慧一炬之後而又重罹兵燹世鮮善刻今得蜀本板正頗完云云』とあるのを見れば、趙大師の眞本は蜀本なりしとも考へられる。『雪堂の刊本』は福本か。何れにしても張明遠以前に何かの刊本のあつたことは確かであらう。それで『重刊』の意味がわかる。『重刊』は大慧の燬いた梓を又新たにしたとの意味であるまい。『江浙の諸禪刹に藏せられて居ない本』は、蓋し寫本であつたと考へられる。張明遠は是等の寫本、刊本を比較校訂して、現今の流布本體に整理したものであらう。

道元禪師の在宋は西、千二百二十三年から二十七年までであるから、開悟の寂後(千百三十五年)八十八年、さつと四年間の滯留である。張明遠本の刊行は大體千三百年後とすれば、道元を隔てること七十七年餘になる。雪堂の刊本は或は此間に出來たものであらうか。道元禪師が『一夜に寫し上げた』と云ふ碧巖集は果して禪師自身の筆であるとしても、其原本は刊本でなくて寫本であつたと思はれる。刊本ならば、現に『一夜本』に見られる如き寫誤―餘り文字の知識なき寫字生の寫誤と考ふべきものは、出て來なかつたらうと推定してよからう。禪師在宋の頃にはまだ刊本がなくて寫本のみが『四方に流傳して』居て、

『或は踏駁を致し』たものであらう。

『一夜本』はそれ故蜀本・福本・『雪堂の刊本』及び張本よりも、一番古きものの型を具へた碧巖集と査定して可ならんか。

(蜀本等四本の外に尙『川本』の云ふのがあつたかしらん。流布本第百則中祖庭事苑より引文の終りに『川本、無此楚王一段』と註してある。誰か『蜀本』の事とその傍らに書き入れて居るのを見れば、(寛本板、瑞龍寺本卷十、三十丁ウ、『川本』は『四川本』で、蜀本と同義か。種電抄にも確か少なくとも一箇處『川本』と書いたところがある。第八十一則『塵中塵』の本則中『三步雖活五步須死』とある雪寶の拈弄に對する下語の後半、『復云』以後の分を川本に従つて之を削ると種電抄は云ふ。不二抄によれば、福本に是等の文字なしとの事である。福本にも『川本』にもその部分なかりしか。)

今日では流布本の碧巖集十巻だけがある。支那では知らず、日本にては今日の處蜀本も福本も見當らぬ。幸に『一夜本』があるので、碧巖の書誌學的研究のみならず、釋義的方面にも、大に參考になると信ずる。蜀本か福本がどこかに見付かるとまた此方面の研究に進歩を見るは固よりのことである。それから碧巖作成の歴史に關する知識にも何等かの貢獻をするであらう。

(此一篇を書き了つてから、支那光緒年代に出版の碧巖集を入手したが、その序文に南本北本と云ふことが書いてある。而してそれが何れも刊行者の手に收められなかつたと云ふ。南本・北本は福本・

蜀本に相當するものなのか分明せぬ。

蜀本は何時出来たかわからぬが、圓悟は蜀で示寂して居るから、自然彼の弟子等も彼と共に蜀に行き、法話の寫本をも携へたことであらう。碧巖集が成都の大聖慈寺の白馬院の趙大師の房で印行せられたのは或は圓悟寂後のことであつたらう。此本はよく纏つて居たものと想はれる。『宗門第一書』の扉に銘記せられる『趙大師房真本』と云ふもの、流布本第五卷の末尾の識語中の『蜀本』及び不二抄の終末に『福本凡例』があるその中に出る『三聖堂趙大師印本』、是等三個の引合ひは何れも同一本であらうが、張本も福本も餘程これを頼りにしたらしい。圓悟が始めて雪竇の頌古に下語し、評唱したのが蜀であつた。關無黨の後序にもある如く、門人の既にこれを援録したものがあつたのだから、成都で始めての刊行を見たのは、理の尤も然るべきところである。併しこれは大慧の熾いたものでは勿論ない。

次に福本はどんなものであつたか、それはよくわからぬ。不二抄の末尾に『福本凡例』として次の事項が記されて居る。

『佛果碧巖錄序在普照序首。』

『垂示題皆云師示衆云而低三字云。』

『普照序終云。近尋到成都府大聖慈寺白馬院三聖堂趙大師印本。對勘影行。即無差誤。福州城東。尊儒坊口。林宅新板印行。題號錄字作集字。』

此三項の記述で知り得ることは、福本に普照の序があると云ふことが第一である。併しこれは必ずしも普照が序を書いたとき、即ち南宋の高宗、建炎戊申（西、千二百八十八年）の歲に、刊行せられたと云ふ意味ではあるまい。單に福本は普照本に基いて出来たと云ふことを示唆するものであらう。而して此普照の序の上に又別の序があつて、それは『佛果碧巖錄序』と題せられてあつたのだ。これが第一項の趣旨であらう。

第二項は、福本では流布本に見ゆる『垂示』と云ふ文字が、『師示衆云』となつて居て、それが三字下げて書いてあると云ふことだと解せらる。『一夜本』にも『示衆』とあるから、碧巖の原寫本には何れも『垂示』とはなかつたのであらう。垂示と云ふ文字は何時頃から使用せられたか知らぬが、示衆は一般にその時代に用ゐられて居る。示衆を垂示と改めたとすれば、その理由又は事由と云ふべきものが、何れにあつたか。これがわかると、或は碧巖—福本でも蜀本でもの始刊の時代がわかるかも知れず。術語使用の歴史に知識のない自分では不明を白狀するより外ない。

第三項には又普照の序が引合ひに出るが、この『終』りと云ふのは、序文そのものと本質的或は機械的に聯關して居るものではないだらう。只機械的に序文の末に書き添へられて、印行の次第を記したものであらう。『題號の錄字を集字となす』は、福本は、碧巖集と題せられたとの意味か。果して然らば、第一項の『佛果碧巖錄序』との關係はどうなるか。こんなことは今自分等の持つて居る材料ではわから

ぬと云ふのが正直なところであらう。

張本の印行は流布本の諸序文を見ればわかる。原稿は元の世宗のとき大徳四年(西、一三〇〇)に出来上つた、而してそれから愈々版にするまでには十七年もかかつて居る。海粟老人や希陵比丘の後序の如きは延祐四年(西、一三二七)の日附である。碧巖集の刊行の如き必ずしも容易な業ではないのである。これで見ても、圓悟在世の時、その板が出来て居て、大慧がそれを熾いたとは考へられぬ。

『一夜本』と流布本との比較研究、及び不抄や種電抄を通じて蜀本及福本との比較研究は、『一夜本』の活字版が出来たので、識者は各自の立場から、次第にそれを遂行せらるることと信ずる。此には校訂者として一二氣付いたことを述べる。それはまづ主として垂示即ち示衆に關したことである。垂示と本則との實質的內面的關係はどれほど緊密なもので、その配置はどれほど絶對的なものであるかは頗る疑問だと思ふ。今はそれを論ずべき時ではないが、これだけは云へる、『一夜本』における示衆の配置は、必ずしも流布本の如くでない、また彼にありて此にないものもあると。例へば次の表を見よ、

期	名	流布本の垂示は	一夜本の示衆は
第一	『聖誦第一義』	一夜本のどこにもなし。	流布本、第二則の垂示に當る。
第二	『趙州至道無難』	一夜本、第一則の示衆にあたる。	流布本、第一則の垂示にあたる。

第三 『日面佛月面佛』

一夜本、第二則の示衆にあたる。

流布本、第四則の示衆にあたる。

第四 『徳山挾襖子』

一夜本、第三則の示衆にあたる。

なし。

是等の轉置によりて見ると、少なくとも始めの四則間における垂示と本則の聯絡は、流布本だけで見て居るやうに、緊密で必然性をさへ帯びて居るものとは考へられぬ。悉くの垂示が移動性を持つて居るとは云はれぬまでも、或る程度までは、垂示の大風呂敷性に富んで居ることは認めなくてはならぬ。

流布本第四十六則、『鏡清雨滴聲』の垂示は、『一夜本』第四十八則『招慶翻御茶鉢』の示衆である。『一夜本』の鏡清の則には何等の示衆が見えぬ。而して流布本の招慶の則にはまた何もなし。『一槌便成云云』の垂示の如きは、他の多くの垂示の如く、一般性に富んだものである、それでこんな事を考へ浮べることがある。曰く、もし一一の垂示がその本則といつても不可分離的緊密性を以て、相關係して居るものとするれば、圓悟の評唱中に、何かその垂示の本旨の殊にその則に對して意味ある所以に言ひ及ぶべきであらう。それにも拘はらず、彼は本則を評唱するに當りても、何等其垂示の内容、もつと其具體的内容に觸れることをせぬ。垂示はいつも評唱にありて避離性を持つて居る。一口で云へば、垂示は垂示で獨立、評唱は評唱で獨立と云ふことになつて居る。もし垂示はいつも本則を顧みて居るとすれば評唱も亦固より本則の評唱であるから、垂示と評唱と何かの處で相照應の氣合を示さなくてはならぬ。それがどうもはつきりせぬ又はしつくりせぬとなると、垂示又は示衆は、必ずしも特殊の本則を目當にしな

で、一般的に禪宗の端的を示唆したものと見てはいけなうか。

例へば第一則に附してある流布本の垂示『隔山見煙云云』の如き、これが聖諦第一義の問答のどの點に對して特殊の關係を持つて居るか。『是什麼人行履處』と云へば達摩を指すと禪人は辯明するであらうが、それは必ずしも碧巖集第一則の達摩のみを指名すべきでなく、百則中のどの禪匠に對しても云ひ能ふと自分は信ずる。第二則の趙州の場合でも『逆順縱橫與奪自在』と、云つてよい。達摩の『不識』と趙州の『我亦不知』と、何れも『向上宗乘中事』を説いて説かず、説かずして説くものではないか。特に趙州が『問事即得、禮拜了退』と云ふ如き、平平淡淡の處、尋常茶飯の處に、其禪機を横溢せしめて居る。大にその『與奪自在』なるを見るべきではないか。第一則の垂示も、第二則のも兩者俱に一般性を帯びて居るので、これを碧巖百則に對する總序的なものと云つても差支ないのだ。

『至道無難、唯嫌揀擇』に關する趙州の問答は碧巖中に四則ある、その一は第二則、その二・三・四は第五十七則・第五十八則・及び第五十九則である。『一夜本』には第二則の『我亦不知』にのみ對して示衆が附せられ、その他の三則には何にもない。流布本に至りては、第五十七則、『田單奴』及び第五十九則、『只這至道無難』に垂示があり、只第五十八則、『分疎不下』にのみこれを缺いて居る。流布本が『至道無難』の四則に對して、その一にのみ垂示を缺き、『一夜本』が最初のものにのみ垂示があつて、その外のものに何もないと云ふのは、只偶然にこんな事になつて居るだけだと見做すべきか。はた又兩者の相違

に何かの意圖又は意味を見出すべく務めねばならぬか。

流布本第九十則、『智門般若體』と第九十四則、『楞嚴不見』に附いて居る垂示が似て居る事實は、前人の既に指摘したところである。『一夜』本に在りては、この邊の則の順序がちがつて居て、流布本の第九十則が『一夜本』の第九十三則に當り、流布本の第九十四則は、『一夜本』の第九十四則となつて居る。それ故『智門般若』の則と『楞嚴不見』の則とは、『一夜本』に在りては順次して居る。不二抄によれば、福本の順序も『一夜本』と同様、『智門般若』の次ぎに『楞嚴不見』があり、後者には垂示の語なしと云ふ。流布本では何故に兩則の間に隔りが出来て、似たやうな垂示が重ねられたか。碧巖百則の順序は始めから殊にその後半において、一定しなかつた事實は後表でもわかるが、流布本のやうになつた原因はどこにあつたか知らん。ここにも亦碧巖成立史に關する問題があらう。それはとに角として、『智門般若』の垂示、示衆と『楞嚴不見』の垂示とを比較すれば左の如くである。

『一夜本』示衆云(智門般若)

聲前一句。千聖不傳。面前一絲。長時無閉。淨裸裸。赤洒洒。露地白牛。

流布本垂示云(智門般若)

聲前一句。千聖不傳。面前一絲。長時無閉。淨裸裸。赤灑灑。

流布本垂示云(楞嚴不見)

聲前一句。千聖不傳。面前一絲。長時無閉。淨裸裸。赤灑灑。露地白牛。

身卓朝。
作變生。
舉看。

頭遷發。耳卓朝。
且道作變生。
試舉看。

眼卓朝。耳卓朝。
金毛獅子則且置。
且道作變生是露地白牛。

第九十則『智門般若』の垂示に關して、不二抄に云はく、

『福本、此古則次下有第九十四後嚴經古則。其古則無垂示語。今張本兩則不相連綴。垂示亦却再出。此淨、蝶々等似不成語。當須兩處垂示互看以足其語乎。』

第九十四則『後嚴不見』の處に云はく、

『此古則。福本在第九十智門般若體用公案之次。而不重標垂示語。而今移在此後。出垂示語。余謂若據福本一則露地白牛以下二十七字。當從九十九則垂示。若亦如此。則當須復出金毛獅子四字。』

不二の意見によれば、露地の白牛も金毛の獅子もはいつて居る垂示を『般若體用』の則にも『後嚴不見』の則にも共に用ゆべきであると云ふのであらう。

『一夜』本には、般若と『後嚴』が相次第して出て来て、前則の『般若』に示衆があつて後則の『後嚴』に缺けて居て、而してその示衆の中に『露地の白牛』が居るとすると、兩則の間に何かの關係があるもの

とも考へられぬことはない。張本即ち流布本が整理せられるとき、何かの工合で『金毛の獅子』も同居することになつたと見える。そのときの精確の事由は自分等の現時接し得るだけの文獻ではわからぬ。とに角、垂示と云ふものは、特に研究を要する題目である。百則の一一に垂示があるわけでなく、垂示のなくてよいと思ふところに、(例へば趙州至道無難の或る則に)、それが有り、有つて然るべしと思ふところに何も無いなど、何が故にしかく不規則であるか。單なる偶然性に歸すべきであらうか。それから垂示の文體は評唱と全く相異なる。評唱は圓悟の説法の筆記覺書であるから、文體も文字も口述の痕跡を存するわけであらうが、垂示の美言麗詞を並べ立て、頻りに對句を用ゆる如きは。明かに推敲を経たものであらねばならぬ。圓悟は一則を評唱する毎に垂示を用意して来て、大衆の前にまづそれを讀み上げ、それから本則を擧し、雪竇の頌を誦し、下語を加へ、評唱をやつたものか。時には垂示の用意をしなかつたこともあつたか。その必要がないと思つたか。或は弟子達の中でこれを記して置くことを怠つたか、わすれたか。『一夜本』と流布本の間に、殊に頭初の四則間に於ける混同を何と説明するか。流布本中にあつて、『一夜本』のどれにも附けてない垂示を何と見るべきか。こんな問題の解決は宋代に於ける禪堂生活の實際、即ち今の場合では碧巖に於ける本則と頌との評唱は、實際どんな鹽梅に出來たかがわかると自ら可能になる。

示衆と垂示との間に於ける異同は、その短篇なるためか、或は既に用意せられてあつたと云ふ爲か、

固より評唱の場合の比でない。それでも左記のやうなのがある。

『一夜本』第六十一則（風穴家國異處）示衆云

建法幢立宗旨還佗本分宗師認龍蛇別
編素須是通方作者劔刃上有論教活則且
致獨資中事若何

流布本第六十一則（同上）垂示云

建法幢立宗旨還他本分宗師定龍蛇
別編素須是作家知識劔刃上論教活棒
頭上別機宜則且置且道獨據資中事一
句作麼生商量試舉看

意味の上では變りはないが、文字の上では多少の出入がある。こんな相異は、寫字生の誤寫とは云はれぬまでも、相異は相異であるから、各々の原本に既に有つたものであらう。

流布本にあつて、而かも『一夜本』のどこにも見えぬ垂示は左の三つである。

第一則、『達摩廓然無聖』の垂示、『隔山見煙早知是火。云云。』

第五十七則、『趙州、天上天下唯我獨尊』の垂示、『未透得已前一似銀山鐵壁。云云。』

第五十九則、『趙州、何不引盡這語』の垂示、『該天括地越聖超凡。云云。』

下語又は著語と云ふものが禪に發生し發展して來たことは固よりその然るべきところである。歴史的にその發生は何時頃であつたかわからぬが、或る禪匠の問答が行脚の雲水によりて諸方に傳はるとき、

他の禪匠はそれに對して何かと云ふ。それは解釋や説明でなくして、批評であり鑑賞であり、拈弄であり、代語又は別語であり、揶揄でもあつたりする。禪經驗に對して、禪者自身はこんなやうな態度を持つて居るのが普通である。分別意識的に批評したり、判斷したり、解釋するは、彼等の好まざる所である。それ故、他の表現に對しては、自ら逆説的、揶揄的とも見える方向に轉回する。經驗そのものを、内面から言ひ表はさんとする、いつも他が白と云ふとき黒と云つたり、何か利巧さうなことを云ふと、『何を道ふのだい！』などと、傍人から見ると喧嘩でもして居る如く見える。それは止むを得ぬ、而してそれが、『下語』又は『著語』として知られるものの心理的方面である。

圓悟は本則及び雪竇の頌を評唱しそれに下語するに當り、どんな鹽梅にそれをやつたかわからぬ。『擧す、徳山鶴山に到る』と説き出して、そこで一寸息を休めて、『擔板漢！』とやり、それから『複子を挟んで法堂上にあいて』と云つて、又一休みし、『敗缺を納る』と唱へたものか、而してそれが壇上に出て一句を読み進むに當り、心に浮むまを、その時／＼に應じて唱へ出したか。或は豫じめ用意したものを讀んだか。或は一に用意しなくても、本則なり頌なりを大體の上に考へ定めてあいて、それからいよ／＼大衆面前に出たとき、縦横にその博辯を揮つたものか。

單な想像では見當をはずれると思ふが、下語の實際に書きのこされたものを調べると、自分の推測は次の如くである。圓悟は本則なら本則に對してまづ自分の見どころを定めおく。垂示は必ずしも特殊性

を帯びなくても、一般的に大衆を啓蒙させるやうな文句で、簡潔を主とした、而して漢文独自の妙味を發揮するやうな言ひまわしをする。愈々本則を擧げるに當りては、そのとき々の禪意識の動くままに天禀の才能と見處の明白と學問の深さとに任せて、所謂手に信せて拈じ來れば、是ならざることなしで、七縦八横的に、やつてのけたものであらう。碧巖百則の評唱が成都と夾山と道林との三處で行はれたと云ふ故、下語も自ら其時々のものが載録せられて、或は一つの下語しかないときもあり、時には五六句の場合もあるのであらう。圓悟は豫じめこんなものを一一用意して來て、刊本、寫本の碧巖集に見えるやうに、此處では一つ、彼處では三つ、又その外の處では四つ五つと云ふ風に考へたものではあるまい。何れもインプロンプチュで即興性を帯びて居るものと思へたい。それで『一夜本』と流布本との間に見る如き數量の上及び文字の上の相異の説明がつくと思ふ。時には下語が異つた文字の下に在るは必ずしも弟子の覺を違ひだけではなく、圓悟自身も或る意味で脱線したかも知れぬのである。

『一夜本』と流布本との間に見える下語の數量上の相違を示す二例。

一、第六十則(雲門柱)中、『山河大地甚處得來』と云ふに對して

一夜本

流布本

(1) 十方無壁落。四面亦無門。

(1) 十方無壁落。四面亦無門。

- (2) 東西南北四維上下。爭奈這箇何。
- (3) 若道有即踏。若道無即死。
- (4) 還見雲門爲人處也無。
- (5) 還我拄杖來。

(2) 東西南北四維上下。爭奈這箇何。

二、第七十則(仰山歌)(流布本第六十八則)、中の『仰山呵呵大笑』とあるに對して

『一夜本』

流布本

- (1) 可謂是箇時節。
- (2) 錦上鋪花。
- (3) 天下人不知落處。

- (1) 可謂是箇時節。
- (2) 錦上鋪花。
- (3) 天下人不知落處。
- (4) 何故。土曠人稀相逢者少。
- (5) 一似巖頭笑。又非巖頭笑。
- (6) 一等是笑。爲什麼却作兩段。
- (7) 具眼者始定當看。

(これは別項にせぬ方がよいかも知れぬ。)

『一夜』本と流布本との間に見える下語の位置の相異二例。

一、第一則 (達摩與梁武帝)

『一夜本』

志公云。陛下還識此人否。
和志公。趕出國始得。
好與三十棒。

帝曰不識。

却是武帝承當達摩公案。
達摩來也。

二、第四十則 (龜互天地同根)

『一夜本』

舉陸巨大夫與南泉語話次。夫云。摩法師道。天地同根。萬物一體。也甚奇怪。

流布本

志公云。陛下還識此人否。
和志公。趕出國始得。
好與三十棒。
達摩來也。

帝云不識。

却是武帝承當得達摩公案。

流布本

舉陸巨大夫與南泉語話次。陸云。摩法師道。天地與我同根。萬物與我一體。也甚奇怪。

鬼窟裏作活計。

畫餅豈可充肚飢。

也是草裏商量。

南泉指庭前花。

鴛鴦繡了從君看。不把金針度與人。

引得黃鸝下柳條。

且莫寐語好。

召大夫云。時人見此一枝花。如夢相似。

道什麼。經有經師。論有論師。

且不干山僧事。咄。

鬼窟裏作活計。

畫餅不可充飢。

也是草裏商量。

南泉指庭前花。

道什麼。咄。經有經師。論有論師。

且不干山僧事。咄。

大丈夫當時下得一轉語。不唯截斷南泉。

亦乃與天下衲僧出氣。

召大夫云。時人見此一枝花。如夢相似。

鴛鴦繡了從君看。莫把金針度與人。

莫寐語。

引得黃鸝下柳條。

下語の順序や文字、或る場合では意味の相異の例二。

一、第二十一則(智門蓮華)の頌

【一夜本】

蓮花荷葉報君知。

老婆心切。

見成公案。

文彩已彰。

出水何如未出時。

泥裏洗土壤。

分開好。

不可便恁麼去也。

江北江南問王老。

主人公在什麼處。

備自踏破草鞋。

流布本

蓮花荷葉報君知。

老婆心切。

見成公案。

文彩已彰。

出水何如未出時。

泥裏洗土壤。

分開也好。

不可備恁麼去也。

江北江南問王老。

主人公在什麼處。

問王老師作什麼。

開黎又問山僧作什麼。

一狐疑了一狐疑。

一坑埋却。

自是備疑。情未息。

打。還會麼。

你自踏破草鞋。

一狐疑了一狐疑。

一坑埋却。

自是你疑。不免疑情未息。

打云會麼。

二、第三十一則(麻谷持鉢)の頌の一句。

【一夜本】

古策風高十二門。

何似這箇。

切忌向拄杖頭上作活計。

棒頭無眼。

明如日。

要識真金火裏看。

流布本

古策風高十二門。

何似這箇。

切忌向拄杖頭上作活計。

杖頭無眼。

『一夜本』は碧巖集研究の上にとれほど利用せられたかはわからぬ。第一刊行本がないやうだから、世間一般には知られて居ない。それから禪僧は、大體の上において、文字に對する理解が少ないので、自然その邊の詮索を苟且にする。種電抄の實統と耳林抄の風外老師とは、その間に在りて特例と見るべきであらう。今耳林抄の實例を擧げんに、耳林抄には處處に『一夜に便打の二字あり尤もよし』とか、『云の字一夜に無し』とか、『一夜になし山僧はとらず』、『一夜になし衍文』、『一夜に無れども在てよし』など云ふ語が見える。風外は僅に『一夜本』を利用して居る。これからは、もつと『一夜本』を歴史的に書志學的になど見て行く必要があると信ずる。而してそれが今は十分に可能になつたことを喜ぶ。

百則の次第につきて、『一夜本』と流布本の間には相違がある。上卷は何れも同じであるが、『一夜本』の第六十六則、『大龍堅固法身』から、第九十三則、『智門般若體』に至るまでの間、『一夜本』の順序は流布本のと異つて居る。左の表を見よ。

『一夜本』	流布本
第六十六則 (大龍堅固法身)	第八十二則
第六十七則 (雲門古佛露柱)	第八十三則
第六十八則 (巖頭黃巢過後)	第六十六則

第六十九則 (傳大士講經)	第六十七則
第七十則 (仰山問三聖)	第六十八則
第七十一則 (南泉一圓相)	第六十九則
第七十二則 (百丈併御咽喉)	第七十則
第七十三則 (百丈問五峯)	第七十一則
第七十四則 (百丈問雲巖)	第七十二則
第七十五則 (五祖四句百非)	第七十三則
第七十六則 (金牛飯桶)	第七十四則
第七十七則 (大光作舞)	第七十三則
第七十八則 (鹽官犀牛扇子)	第九十一則
第七十九則 (世尊陞座)	第九十二則
第八十則 (烏白屈棒)	第七十五則
第八十一則 (丹霞喫飯來也未)	第七十六則
第八十二則 (雲門胡餅)	第七十七則
第八十三則 (開士悟水因)	第七十八則

第八十四則 (投子一切佛聲)	第七十九則
第八十五則 (趙州初生孩子)	第八十則
第八十六則 (藥山塵中麈)	第八十一則
第八十七則 (維摩不二法門)	第八十四則
第八十八則 (桐峯庵主作虎聲)	第八十五則
第八十九則 (雲門厨庫三門)	第八十六則
第九十則 (雲門藥病相治)	第八十七則
第九十一則 (玄沙三種病)	第八十八則
第九十二則 (雲巖大悲千眼)	第八十九則
第九十三則 (智門般若智體)	第九十則

上來大體に於いて『一夜本』につきて、自分として言ひ得べきところを述べたつもりである。色々細目の研究、及び文字學上より原寫本を鑑賞し又は批判すべき事項があるのであるが、それはその途の人に委ぬべきであらう。『一夜本』を活字にするに當り、成るべく原寫本の面影を存することに注意したこと、明白な誤寫、脱落顛倒でない限りは、その儘にして、欄外に注意してゐたこと、大體の場合、

俗字は正字に直したこと、二三の場合では原寫本のままの字體を存したこと等を述べて此稿を了る。

此活字本を利用せらるる人達と共に感謝することを忘れてはならぬのは、大乘寺現董渡邊玄宗師の厚意と好學の志とに對してである。これがなかつたら、此の如き校訂の不十分—これはいくらやつても自分の如きものの力では及ばぬところ、いつも不十分—なものでさへも、世に出ることはないのである。最後ではあるが、東京の石井積翠居士及び大阪の安宅自安居士が、正法建立に對する志の頗る深くして、編者の如き學問も識見も乏しきものを激勵して、諸種の便宜を與られ、とに角、此書の校訂を了へしめられたことは、こんな仕事にたづさはる人々の共に感謝すべきところである。昭和十二年五月に原寫本を金澤の大乗寺で寫真にしてから、今日で四年を少し超えて居る。その間個人として自分の身邊に種種の出來事があつたはとに角として、如何にも變り行きつつある世の中ではな

るか。

昭和十六年七月

洛北也風流庵にて

鈴木大拙

終

